



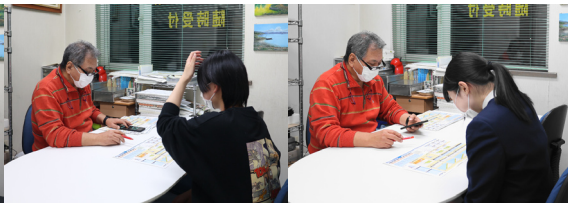
1月10、11日の道コン受験の様子



道コンの見直しです 終わったとの見直しは大事です



1月11日の中3生の道コンの結果を踏まえての面談



中3生の全員授業



全国の過去の入試問題に挑戦



1/26 倍率説明



全8回の入試直前ゼミ



日常の授業の様子



日常の授業の様子



高校生も一生懸命勉強します



たくさんさんの差し入れあり
がとっございました!



28期生の成田くるみさん、今年、高校卒業ですね。



8期生の小路大輔君、防水屋さんとして独立しました。

入試まで30日!
年が明けて令和4年の1月もあっという間に過ぎてしましました。高校入試まで残り30日ですが、新型コロナウイルス感染の「第6波」の急拡大により、北海道も27日から2月20日まで、まん延防止等重点措置が適用されました。
26日に入試の出願状況が発表されました。各校の倍率は昨年とほぼ変わりなく、明輝高校の倍率が高く、1.57倍で76名の定員オーバーとなっています。しかし、このうち30名以上は例年通り志望校を変更すると思われれます。
今年も共通テストと同じように高校入試も難しくなるだろうと言われていました。
知識だけではなく、読解力、表現力、発想力が問われる入試になると思われれます。さらに裁量問題が廃止され、試験は100点満点ですから点の取りづらい入試になると思われれます。
それらをふまえて、今年の塾の入試直前ゼミでは、今までにないような内容で授業を行っています。残り30日、1日、1点上げるつもりで頑張りましょう。

試験が難しくければみんな出来ません。なのでチャンスなのです。
高校入試はあくまでも人生のスタート地点、通過点です。最後まで諦めずに強い意思と覚悟で志望校に向かいましょう!
その目標に向かって努力した人と、しなかった人では、将来大きな差になるのです。
オンライン授業 学校対応に格差
新型コロナウイルス感染の「第6波」が急拡大する中、釧路市内の小中学校でオンライン授業が本格的に始まっているが、学校の対応に差が生じている。ビデオ通話で先生と子どもが双方向にやりとりする学校がある一方、未実施の学校も。保護者からは「平等に授業を受

けられるようにして」と改善を求める声が上がっている。
市立共栄小は、26日まで学級閉鎖していた2クラスでオンライン授業を実施。児童はタブレット端末を使い、ビデオ通話で先生や友達と顔を合わせた。同校は昨年4月に市教委から端末が配られて以降、児童も交えてオンライン授業の練習を重ねてきた。寺田裕子校長は「コロナ禍でも学びの機会を守りたい」と話す。
道教大付属釧路義務教育学校は27日、7・9年生（中学1〜3年生）の全9学級でビデオ通話によるオンライン授業を始めた。8年生は学年閉鎖しており、7・9年生は感染者はいないが、高校入試を控えることから感染予防のため、生徒に在宅を促すことにした。
北海道新聞1月29日
市内の小・中・高のあつちこつちで感染が広がりが、学級閉鎖、学年閉鎖や休校になっています。
昨年、小学生、中学生の全員にタブレットが配布されましたが、オンライン授業が出来るところと、出来ないところがあります。出来ないところ

の保護者の不満は当然のことだと思います。決してオンライン授業が対面授業より良いとは思いませんが、学級、学年閉鎖の状況下では致仕方ありません。だとしたら最低限、平等に授業を受けられるように早急に対応する必要があります。
ステップゼミナールでは、一昨年の1月末の休校のときから塾内のサーバーに直接接続し、家庭でも学習できる体制にしています。
家庭にネット環境があり、ウィンドウズの動くノートパソコンやタブレットなどがあれば持ってきて下さい。接続のためのセットアップを行います。なお、塾は原則として、学級閉鎖、学年閉鎖の場合、学校の定めた一定期間は通塾も控えてもらう事としますのでご了承ください。
入試まで30日、学校や家庭でもそうだと思いますが、塾でも手洗い、マスク、消毒、換気を徹底していただきます。受験生が感染することなく万全な体調で入試に臨めるようにご協力お願いします。

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火
	休塾				天皇誕生日 休塾			休塾					★私学入試★		★高専入試★	直前ゼミ(8)	建国記念の日 休塾					直前ゼミ(7)	直前ゼミ(6)		★全学年学力テスト★		
<p>マスク、手洗い、消毒を!</p> <p>携帯・スマホ持ち込み禁止!</p> <p>ストップ 過保護・過干渉!</p> <p>がんばれ受験生!</p> <p>公立高校入試まであと30日</p> <p>2月の予定</p>																											

在籍する生徒の所属校
小学校 昭和・愛国・遠矢
中学校 美原・景雲・鳥取・鳥取西・附属 富原 遠矢
高校 湖陵・江南・北陽・東・工業・高専

子どもの自殺 初の400人超 不登校は19万人以上で過去最多

昨年度、自殺した児童や生徒は初めて400人を超え、小中学生の不登校は19万人以上と、いずれも過去最多となったことが分かりました。

調査した文部科学省は「極めて憂慮すべき結果で、コロナ禍による環境変化が大きな影響を与えていることがうかがえる」として、SOSを発信しやすい取り組みが重要だとしています。

文部科学省は、全国の小中学校と高校、それに特別支援学校を対象に不登校やいじめ、自殺などの状況を毎年調査していて、13日、昨年度の結果を公表しました。

それによりますと、自殺した児童生徒は小学生が7人、中学生が103人、高校生が305人となり、合わせて415人と前の年度から100人近く増えて過去最多となりました。

また、学校を30日以上欠席した不登校の小中学生の人数は、前の年度から1万5000人近く増えて19万6127人と過去最多となっています。

不登校の子どもの割合も、この10年で小学生は3倍に増えて100人に1人に、中学生は1.5倍に増えて24人に1人となっています。

また今回は、感染への不安によるいわゆる自主休校など、「感染回避」の目的で30日以上休んだ人数も初めて調査され、小中学生と高校生で合わせて3万287人に上りました。

文部科学省児童生徒課の江口有隣課長は「結果からはコロナ禍による学校や家庭の環境変化が子どもの行動に大きな影響を与えていることがうかがえる。特に自殺者の増加は極めて憂慮すべき状況だ。SOSを発信しやすい取り組みを進めるとともに、登校できない子どもの学びの保障に努めたい」と話しています。

児童生徒の自殺の状況 最多は「不明」で半数超える

調査開始以降、最も多くなった児童生徒の自殺。

この10年で2.7倍に増加しています。

今回の調査では、自殺した415人の児童生徒の置かれていた状況を複数回答で聞いていますが、最も多かったのは「不明」の218人で全体の半数を超えました。

このほかでは

▽「家庭の不和」が53人▽「うつ病などの精神障害で治療中」が46人▽「進路の問題」が44人▽「父母などの叱責」が33人▽世の中に価値がないなどと悩む「えん世」が22人▽「学業不振」が20人となっているほか▽「いじめ」が12人となりました。

警察庁の調査では、昨年度は暫定で500人を超えていて、学校や教育委員会が把握していない事例がさらにあるとみられています。

不登校の要因「無気力・不安」が最多に

8年連続で増え続け、19万6000人余りと過去最多となった小中学生の不登校。

調査で「主たる要因」を聞いたところ

▽最も多かったのは小中学生ともに「無気力・不安」で、前の年度より7ポイント高くなって47%に、

続いて▽「生活リズムの乱れなど」が、前の年度より3ポイント高くなり12%でした。

▽「いじめを除く友人関係を巡る問題」は、前の年度より4ポイント余り減って11%となりました。

欠席日数が年間90日以上の小中学生は10万7000人余りと55%を占め、長期に及ぶケースが多くなっています。

30日以上学校を休んだ「長期欠席」の小中学生は全体で28万7747人となっていて、「不登校」以外では

▽今回初めて調査された新型コロナウイルスへの不安などから「感染回避」の目的で休んだ小中学生が2万905人だったほか

▽病気やけがによる入院や自宅療養で休んだ小中学生が4万4427人

▽保護者の無関心や家族の介護といった家庭の事情、それに連絡先が不明なまま休んだ子どもは2万6255人に上っています。

パソコンや携帯電話など使った「いじめ」は増加傾向

いじめは、過去最多となった前の年度より減少しましたが、パソコンや携帯電話などを使ったいじめは増加傾向にあり、引き続き早期発見や積極的な対応が求められています。

昨年度、認知されたいじめの件数は、小学校で42万897件、中学校で8万877件、高校で1万3126件、特別支援学校で2263件と、合わせて51万7163件となりました。

過去最多となった前の年度より9万5333件減っていて、全体としては、いじめの定義を変更した平成25年度以来、7年ぶりの減少となりました。

文部科学省は、コロナ禍により物理的な接触が減ったことや、休校で授業日数が例年より少なかった学校もあったことなどが背景にあるとみています。

いじめの状況について複数回答で聞いたところ、

▽「冷やかしかからかいなど嫌なことを言われる」が最も多く59%▽「軽くぶ

つかられたり叩かれたり蹴られたりする」が22%と続きました。

いずれも減少している中で、唯一件数が増えていたのが、

▽「パソコンや携帯電話などでひぼう・中傷される」で、前年度より946件増えて1万8870件と、ここ5年で倍増しています。

いじめの発見のきっかけは、

▽「アンケート調査など」が55%と最も多く▽「本人からの訴え」が18%▽「保護者からの訴え」が10%▽「担任が発見」は10%でした。

文部科学省は「いじめの認知件数が減った背景には、感染対策によって物理的な接触の回数やコミュニケーション自体の減少があると考えられるが、コロナ禍への対応に追われる教員が、子どもの声を十分キャッチできなかった可能性も否定できず今後も注視していきたい」と話しています。

増える「しんどい」子どもたち

不登校の子どもたちの居場所づくりを行う川崎市のNPO法人には、コロナ禍で子どもや若者から「しんどい」と学校や家庭に関する相談が多く寄せられています。

川崎市のNPO法人「フリースペースたまりば」は、不登校の子どもや引きこもりの若者の居場所作りを長年行って、現在利用しているおよそ140人のうち30人余りが、感染拡大以降に利用を始めたといいます。

ここでは、どのように一日を過ごしたいか、子ども自身が決めることを尊重していて、勉強や楽器の演奏といった学びのサポートも受けられるほか、パズルやゲームをしたり、スタッフたちと作った食事を食べたりして、思い思いに過ごしています。

このうち、この春から利用を始めた小学4年生の男子児童はコロナ禍で友人関係に大きな変化があり、学校に通うのをやめたといいます。

男子児童は「前まで仲よくしていた友達から、急に『死ね』『ばか』と言われるようになってとても嫌でした。先生に相談して仲直りしても同じことの繰り返しで、朝学校に向かうときや帰り道でもたくさん悩み、おばあちゃんにも相談して、ここに来るように決めました。今は友達もできて楽しい。毎日通っています」と話していて、学校のオンライン授業もときどき受けるようになったということです。

また、不登校気味で、この夏から利用を始めた小学3年生の男子児童は、「引越す前まで一緒に遊んでいた友達とも、これまで年に1度はお泊まり会をしていたけれど、コロナでできなくなってしまいました」と残念そうに話していました。

去年7月から居場所を利用している小学5年生の男子児童は、コロナ禍で授業時間を短縮していた期間は登校していましたが、通常授業が再開してから通えなくなったといいます。

男子児童と一緒に訪れた母親は「一斉休校中には友達と遊ばず、休校明けも友達と遊ぶ機会が減りました。いろいろな考え方がありますが、勉強はあとからでもできるので、今は心が折れないよう平常時と同じように友達とたくさん遊んで元気でいてほしい」と話していました。

NPO法人では、不登校や引きこもり、いじめなどの相談も当事者や保護者から受けていて、コロナ禍で相談件数が2割ほど増えたということです。

この中では「きょうだい2人、それぞれが不登校になった」とか、「父親との関係が悪化した」といった家族や学校の問題に関連した相談が寄せられ、中には「しんどい」という子どもたちの声や、「死にたい、疲れちゃった」「いなくなりたい」といった、若者の深刻な声もあがっていました。

NPO法人「フリースペースたまりば」の西野博之理事長は「子どもたちは学校で友達と楽しく給食を食べることもできず、行事も中止となり、抑うつ傾向で学校に行きたくないという相談は増えている。物理的な距離が求められる社会の中で『人と人との心の距離』も生まれてしまったのではないかと。子どもたちは親や先生にも気を使いながら生きています。学校でも家庭でもない第3の居場所で受け止められることは必要で、『助けて』とことばにして訴えづらくても誰かがSOSに気付いてあげなければならない。私たちはみずからの弱さを出せる社会を作っていくことが重要だ」と話していました。

専門家「子どもの状況 大人が想像している以上にストレス」

子どもや若者の心の問題に詳しい中央大学人文科学研究の高橋聡美客員研究員は「自殺の増加に関しては、1つはもともとのリスク要因の『家庭不和』や『親からの叱責』がコロナ禍によるステイホームやテレワークで悪化したこと、もう1つはリスクが高まった一方で、友達と会うなどのストレス対処法が制限され、その両方が相まって増加したと考えられる。不登校の子どもが増加は、コロナ禍で休みやすさが増した面もあるかもしれないが学校に行く楽しみがなくなったことが大きいと考えられる」と話しています。

そのうえで「コロナ禍で学校行事や部活動が制限され、友達との接触が極端に減るといった、子どもたちが置かれている状況は、大人が想像している以上にストレスだと改めて認識し、もっと子どもどうしが触れ合える機会を意識的に持つことが重要だ。また、これまで子どものSOSを受け止めていたボランティア団体の活動なども休止せざるをえない状況だったが、コロナ禍だからこそ、リスクの高い子どもに対する支援を継続しなければならず、気持ちを話せる場など直接相談できる体制作りが重要だ」と指摘していました。